

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月23日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730720

研究課題名（和文） 聴覚障害児における名詞と動詞の共起関係の理解

研究課題名（英文） comprehension of co-occurrence between noun and verb by children with hearing impairments

研究代表者

林田 真志（HAYASHIDA MASASHI）

広島大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：00467755

研究成果の概要（和文）：聴覚障害生徒と健聴者を対象として、名詞と動詞の共起性判断の特徴を分析した。分析の結果、学年が進行しても、聴覚障害生徒における共起対の産出数は増加傾向をみせず、共起性を判断する能力が中学校段階では顕著に発達しない可能性も考えられた。マトリックスを用いて共起対のパターン分析を行ったところ、聴覚障害生徒による名詞と動詞の共起性判断は、健聴者ほど柔軟性に富まず、固定化している傾向が示された。

研究成果の概要（英文）：The present study examined co-occurrence patterns between noun and verb produced by students with hearing impairments, and hearing adults. The number of co-occurrence patterns produced by students with hearing impairments did not increase, with regard to their grade promotion. Matrices based on co-occurrence patterns showed that students' judgment on co-occurrence patterns was less flexible than that of hearing adults.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
2012年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総計	700,000	210,000	910,000

研究分野：聴覚障害教育

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：聴覚障害 名詞 動詞 共起

1. 研究開始当初の背景

聴覚障害児童生徒による名詞や動詞の使用傾向については、品詞ごとに単独で検討した研究が多いが、名詞の特性に応じた動詞の使い分けに関する分析も散見される（斎藤ら、1974；左藤・四日市、2004）。たとえば、斎藤ら（1974）は、聴覚障害児が「(折り紙を)折る」や「(家を)建てる」、「(セーターを)編む」といった状況を説明する際に、それらの動作を「作る」という動詞で代用する傾向

にあったと報告している。同様に、左藤・四日市（2004）も、聴覚障害児が限定動詞（「かじる」、「注ぐ」、「羽織る」のように、特定の対象に対して限定的に使用される動詞）よりも包括動詞（「食べる」、「入れる」、「着る」のように、さまざまな対象に対して汎用的に使用される動詞）を多用する傾向にあることを指摘している。さらに、このような傾向が示された要因として、獲得語彙の偏り、精緻化された動詞表現を文脈情報と対応づける

ことの困難さ、そして名詞と動詞の共起性 (co-occurrence) 判断の固定化 (最初に獲得した特定の名詞と動詞の結びつきが強固であり、異なる名詞または動詞の組み合わせによる結びつきを再構築しにくいこと) をあげている。

この名詞と動詞の共起性とは、文における両品詞の結びつきやすさの指標である。たとえば、「鉛筆」という名詞と「書く」という動詞は共起性が高い (すなわち、文のなかで結びつきやすい) のに対し、「鉛筆」と「育てる」は共起性が低い (一般的な文のなかで、結びつくことは少ない)。名詞と動詞の共起性判断は、両品詞間の意味的整合性の分析をもとになされる (元永・池原・村上, 1999)。そして、両品詞間の意味的整合性の分析は、分析者の経験や知識、言語能力といった諸要因の影響を受けると考えられる。このことと左藤・四日市 (2004) による指摘をふまえると、聴覚障害児童生徒において共起性が高いと判断される名詞と動詞の組み合わせ (以下、共起対とする) の数は、健聴者と比較して少ないと予想される。しかしながら、これまで聴覚障害児童生徒を対象として、名詞と動詞の共起性判断課題を実施した研究はほとんどない。

2. 研究の目的

本研究課題では、聴覚障害生徒および健聴者を対象として、名詞と動詞の共起対を産出させる課題を実施する。この課題をとおして、両者における共起対の産出傾向を比較するとともに、聴覚障害生徒における名詞と動詞の共起性判断の特徴について考察することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 対象者：特別支援学校中学部に在籍する聴覚障害生徒 44 名 (1 年生 16 名, 2 年生 13 名, 3 年生 15 名, 平均年齢 13 歳 9 ヶ月) と健聴な大学 (院) 生 47 名 (平均年齢 21 歳 11 ヶ月) を対象とした。聴覚障害生徒における、良聴耳の裸耳平均聴力レベルの平均値は 95.8dBHL (SD=6.3) であった。

(2) 課題語：「教育基本語彙の基本的研究-増補改訂版-」(国立国語研究所, 2009) に掲載された語彙表をもとに、20 の名詞群 (動き, 顔, 注目, 心, 質問, 意見, 不安, 風, 部屋, 道路, 仕事, 社会, 決勝, 交渉, 資源, 命令, 流行, 鉛筆, ボール, 布) と 11 の動詞群 (あつまる, かわる, えらぶ, なおす, あきる, おうじる, かりる, もちいる, おくれる, うける, わすれる) を課題語として抽出した。

(3) 調査用紙と回答形式：調査用紙の各頁に 20 種類の名詞を設問項目として示し、各項目の下に回答欄を設けた。頁上部の枠内には、選択肢 (動詞) に数字を付して列記した。

対象者は、各設問項目 (名詞) と共起されやすいと考えられる選択肢 (動詞) を頁上部の枠内からすべて選択し、その数字を回答欄に記入するよう求められた。名詞と動詞をつなぐ助詞については、回答欄内に自由記述させた。

(4) 手続き：調査用紙を配布後、音声と手話、文字で教示を行い、回答を求めた。

(5) 分析：各対象者群における共起対の産出数をもとに、動詞の活用形と自他の種類ごとに中央値と四分位偏差を算出した。また、産出された共起対の数をもとに、名詞と動詞の組み合わせごとに産出率を求め、その値をマトリックス上に集計して共起対のパターン分析を行った。

4. 研究成果

(1) 聴覚障害生徒、ならびに健聴者における共起対の産出数 (中央値) を動詞の活用形と自他の種類ごとに算出した (Table 1)。すべての活用形と自他の種類において、健聴者による共起対の産出数が聴覚障害生徒 (中学部 1-3 年生) のそれを上回った。また、各対象者群内で共起対の産出数をみると、五段活用自動詞における産出数が最大値を示し、上一段活用自動詞における産出数が最小値を示した。

対象者群と活用形・自他の種類を要因としたフリードマン検定を行ったところ、それぞれの要因について有意差がみられた。Bonferroni 法による多重比較を行った結果、健聴者における共起対の産出数が、他の聴覚障害生徒 (中学部 1-3 年生) よりも有意に多かったが、聴覚障害生徒では各学年間の産出数に有意差はみられなかった。

さらに、すべての対象者群において、五段活用自動詞および下一段活用他動詞における産出数が他の活用・自他の種類と比較して有意に多く、上一段活用自動詞における産出数が他よりも有意に少なかった。これらのことから、聴覚障害の有無が名詞と動詞の共起対の産出に影響をおよぼすこと、共起対の産出のしやすさは動詞の活用形や自他の種類によって異なることが示された。

Table 1 動詞の活用形・自他の種類ごとの共起対産出数の中央値

	五自	五他	上自	上他	下自	下他
聴1	6.1	4.5	1.3	3.3	4.9	7.2
聴2	6.8	4.5	1.6	3.4	5.0	7.1
聴3	6.4	4.3	1.5	3.3	4.8	7.2
健聴	8.8	6.1	2.8	4.5	6.4	8.4

聴：聴覚障害生 (数字は学年)

五：五段活用

上：上一段活用

下：下一段活用

自：自動詞

他：他動詞

名詞と動詞の間に意味的整合性が生じにくい場合を除いて、産出した共起対の数が少ないということは、両品詞を限定的な文脈のなかで共起させているといえる。左藤・四日市(2004)は、聴覚障害児において名詞と動詞の共起性判断が固定化している可能性を報告しているが、本研究で対象となった聴覚障害生徒においても、同様のことがいえるのかもしれない。また、聴覚障害生徒が産出した共起対の数について学年間比較を行ったが、有意差はみられなかった。この結果より、名詞と動詞の共起性を判断する能力が、中学校段階では顕著に発達しない可能性も考えられる。この点については、さらに対象学年を広げ、産出課題における発達傾向を検討する必要があるだろう。

また、上一段活用自動詞における産出数が少なかった要因としては、使用した動詞の特性が考えられる。上一段活用自動詞以外の動詞は、小学校低学年段階で学習される語であった。これに対し、上一段活用自動詞である「おうじる」だけは、小学校高学年段階で学習される語であった。すなわち、本研究で使用した上一段活用自動詞は、他の動詞よりも意味が限定的であり、結果的に名詞群と広く共起されにくいものであったのかもしれない。左藤・四日市(2004)が指摘するように、動詞はそれ自体の意味が精緻化するほど文脈による制約を受け、共起される対象(この場合は名詞)も限られてくる。上一段活用自動詞に関しては、結果的に他の動詞よりも限定的な意味をもったものが抽出され、名詞群と共起されにくかったと推測される。

なお、聴覚障害生徒における良聴耳の裸耳平均聴力レベルと共起対の産出数の間で相関係数を算出したところ、すべての組み合わせにおいて有意な相関はみられなかった。したがって、本研究で対象となった聴覚障害生徒については、障害の程度と共起対の産出数の間に関連性はないことが明らかになった。

(2) 対象者が産出した共起対を名詞と動詞の組み合わせごとに分類し、(該当する共起対を産出した対象者数) / (群内の全対象者数) × 100 (%) の式からそれぞれ産出率を求めた。それらの数値を名詞(行)と動詞(列)の組み合わせごとに集計し、共起対のマトリックスとして示した。聴覚障害生徒(中学部1～3年生)におけるマトリックスをTable 2に示し、健聴者におけるマトリックスをTable 3に示した。聴覚障害生徒については、先の分析で各学年間の共起対の産出数に有意差が認められず、また特定の学年が特異な傾向を示すこともなかったため、学年の要因を除外して1つのマトリックス上に示した。

なお、マトリックス上の太枠で囲まれたセル(共起対)は、80%以上の産出率であったことを意味している。

Table 2より、80%以上の産出率を示した共起対は、「顔—わすれる」、「仕事—えらぶ・おくれる」、「鉛筆—かりる・わすれる」であった。その他にも、「動き—わすれる」、「顔—かわる」、「質問—わすれる」、「風—おくれる」、「部屋—かわる・えらぶ・かりる」、「仕事—かわる・わすれる」、「流行—おくれる」、「鉛筆—えらぶ」、「ボール—えらぶ・かりる・わすれる」、「布—えらぶ・わすれる」の共起対の産出率が70%を超えた。

Table 3より、80%以上の産出率を示した共起対は、「動き—おくれる・わすれる」、「顔—わすれる」、「質問—わすれる」、「仕事—えらぶ・おくれる・わすれる」、「流行—おくれる」、「鉛筆—かりる」、「ボール—かりる」であった。とくに、「えらぶ」以外の動詞においては、90%以上の産出率が観測された。その他にも、「動き—かわる」、「顔—かわる」、「質問—えらぶ」、「意見—かわる」、「部屋—かわる・えらぶ・わすれる」、「仕事—かわる・わすれる」、「ボール—えらぶ」、「布—えらぶ・かりる」の共起対の産出率が70%を超えた。

聴覚障害生徒において産出率が80%を超えた共起対の数は、健聴者と比較すると約半数にとどまった。産出率が70%を超えた共起対については、両対象者群間で若干の差異はみられたものの、「動き」と「顔」、「質問」、「部屋」、「仕事」、「ボール」、「布」といった名詞を使用している点は共通していた。これに対し、聴覚障害生徒において「風—おくれる」、「鉛筆—えらぶ」、「ボール—わすれる」、「布—わすれる」の共起対は70%以上の産出率を示しながら、健聴者においては70%に達しなかった。対照的に、健聴者では「動き—かわる・おくれる」、「質問—えらぶ」、「意見—かわる」、「部屋—わすれる」、「布—かりる」の共起対は70%以上の産出率を示しながら、聴覚障害生徒においては70%に達しなかった。

まったく産出されなかった共起対(産出率が0%のセル)の数をみると、聴覚障害生徒では30、健聴者では22あった。

Table 2 聴覚障害生徒における共起対の産出率

	かわる	えらぶ	おうじる	かりる	おくれる	わすれる
動き	62.1	2.3	2.3	0.0	64.4	75.9
顔	71.3	4.6	0.0	2.3	0.0	85.1
注目	0.0	0.0	0.0	0.0	4.6	2.3
心	11.5	0.0	2.3	0.0	0.0	13.8

質問	64.4	9.2	46.0	0.0	9.2	71.3
意見	46.0	16.1	4.6	2.3	15.8	25.3
不安	2.3	0.0	0.0	0.0	0.0	34.5
風	6.9	0.0	2.3	4.6	73.6	0.0
部屋	73.6	75.9	0.0	78.2	11.5	41.4
道路	4.6	2.3	2.3	4.6	9.2	25.3
仕事	75.9	82.8	11.5	4.6	80.5	75.9
社会	6.9	0.0	2.3	2.3	4.6	2.3
決勝	0.0	0.0	0.0	4.6	20.7	4.6
交渉	0.0	0.0	41.4	2.3	46.0	2.3
資源	13.8	25.3	0.0	6.9	11.5	0.0
命令	2.3	0.0	29.9	0.0	39.1	29.9
流行	20.7	4.6	2.3	0.0	78.2	2.3
鉛筆	59.8	75.9	0.0	80.5	6.9	80.5
ボール	62.1	73.6	6.9	78.2	11.5	71.3

Table 3 健聴者における共起対の産出率

	かわる	えらぶ	おうじ る	かりる	おくれ る	わすれ る
動き	76.6	46.8	34.0	6.4	87.2	91.5
顔	70.2	38.3	2.1	61.7	2.1	85.1
注目	14.9	0.0	12.8	0.0	25.5	4.3
心	61.7	0.0	6.4	0.0	8.5	21.3
質問	61.7	72.3	59.6	8.5	44.7	83.0
意見	78.7	61.7	23.4	38.3	10.6	42.6
不安	12.8	0.0	4.3	0.0	0.0	42.6
風	31.9	2.1	0.0	0.0	12.8	0.0
部屋	70.2	72.3	2.1	83.0	2.1	74.5
道路	31.9	27.7	0.0	14.9	6.4	51.1
仕事	76.6	80.9	10.6	4.3	100.0	85.1
社会	59.6	4.3	14.9	0.0	36.2	4.3
決勝	6.4	0.0	2.1	2.1	68.1	29.8
交渉	14.9	8.5	46.8	2.1	68.1	17.0
資源	21.3	25.5	0.0	44.7	0.0	0.0
命令	61.7	25.5	48.9	0.0	61.7	63.8
流行	63.8	12.8	10.6	2.1	97.9	17.0
鉛筆	34.0	66.0	0.0	91.5	0.0	66.0
ボール	31.9	70.2	0.0	91.5	10.6	61.7

これらの結果は、健聴者と比較して、聴覚障害生徒が特定の名詞と動詞に限定したかたちで共起対を産出していたことを示している。換言すれば、聴覚障害生徒による名詞と動詞の共起性判断は、健聴者と質を異にするものではないが、健聴者ほど柔軟性に富まず、固定化していると考えられる。

だが一方で、聴覚障害生徒において「風—おくれる」、「鉛筆—えらぶ」、「ボール—わすれる」、「布—わすれる」の共起対は70%以上の産出率を示しながら、健聴者においては70%に到達しなかった。この理由として、たとえば「(文字を書くための)鉛筆をえらぶ」、「(校庭に)ボールをわすれる」、「(家庭科の授業でつかうための)布をわすれる」といったように、中学校段階の生徒にとって学校生活の一場面として想起しやすかった可能性が考えられる。だが、「風—おくれる」の産出率が健聴者よりも高かった理由については、本研究の結果からは推測できなかった。

(3) 本研究課題では、聴覚障害の有無が名詞と動詞の共起性判断に影響をおよぼすことが明らかになった。また、聴覚障害生徒による名詞と動詞の共起性判断は、健聴者ほど柔軟性に富まず、固定化している傾向が示された。これらの傾向を明示した研究は少なく、この点において、本研究課題は独創性に富むものといえる。また、本研究課題から得られた知見は、聴覚障害児童生徒に対する語彙拡充の指導にむけた基礎的資料となるだろう。

今後は、対象生徒の日常でのコミュニケーション手段や読書力といった内的な要因を考慮し、それらが名詞と動詞の共起性判断におよぼす影響について検討する必要がある。また、対象者が共起対を産出する際に使用した助詞についても分析を進め、名詞と動詞の意味的整合性の視点からだけでなく、統語的な視点にたった分析も行う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 林田真志, 聴覚障害生徒における名詞と動詞の共起対の産出傾向, 広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要, 第11号, 査読無, 2013, pp45-51

〔学会発表〕(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林田 真志 (HAYASHIDA MASASHI)
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：00467755

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：